
『バスが来るまで』【掌編・文学】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『バスが来るまで』【掌編・文学】

【著者名】

ZZマーク

【出版社】

山田文公社

【あらすじ】

とある田舎の山奥のバスが車でのお話。

『バスが来るまで』 作：山田文公社

田舎に帰郷して帰る道、ろくに舗装もされていない土の道を歩きながら、バス停に向かう。まわりのどこを見回しても辺り一面が緑に囲まれていて、青葉の香りが立ちこめている。そんな視界が開けた先には、見慣れたアスファルトの地面があり、そこがこの村に面している国道。そしてバス停の看板は、その国道の脇に置かれている。

看板の隣に置かれたベンチは、記憶の限りだと4年前には原形をとどめていたのに、今では骨組みだけが残っていて、ツタが絡みついていた朽ち果てている。

座つて待つことは出来ないので国道脇にある背の低い石垣に腰を預けてバスを待つことにした。標高が高いために茹だるような蒸し暑さはないのだが、木々に囲まれていてために風が止むと、にじみでるような汗がでてくる。仕方なく実家を出るときに渡された団扇で扇ぎはじめた。

蝉の合唱が途切れること無く響いている。木々の隙間から太陽が肌を焼いている。リュックから水の入ったペットボトルを取り出して、水を飲み始めた。

飲み終わり顔を降ろすと、少し離れた脇に帽子を被った白いワンピースを着た少女が立っていた。少女は真っ直ぐにこちらに向かつてきた。そして近付いて来たと思つたら、僕の前を通り過ぎてバス停の時刻表をじっくりと見始めた。そして、しばらくしてから大声で叫んだ。

「うそ！ 2時間に1本つてなに！？」

そして私の方をみて時刻表を指さして言った。

「もしかして、バス待っているとか！？」

僕は辺りを見回して、僕以外を探したが、この場には僕しか居なくて、僕は自分を指すと、少女は僕を指さし頷いた。

「そう、あなた」

「ええ、バスを待つてますけど?」

その言葉を聞くと少女は頭を抱えて天を仰ぎ見た。

「最悪、これだから田舎は!」

そう言い少女は携帯を取り出して、番号を打ち始めた。

「うそ、電波無いし!」

しかし少女は叫んで携帯を閉じて、こちらに向かってきた。

「ねえ、電波の入っている携帯とか持つてない?」

少女の問いかけに僕は首をふって答えた。

「この辺りは自衛隊の中継局があるから、電波は入らないよ」

その言葉を聞き、少女は苛ついた様子で唸りながら、辺りをぐるぐると回り始めた。

「あー、マジ来るんじゃなかつたー」

少女は頭を抱えて悩んでいる様子だった。

「急いでいるの?」

しばらく間をおいて少女は答えた。

「親戚のおばあちゃんの葬式で親に連れてこられて、いろいろござたして、部活があるから自分一人帰るところ」

その話を聞いて、少女がどこの家人か判った。

「ああ、崎村さん所の……部活って今夏休みでしょ?」

すると僕の質問に、少女は身振り手振りを交えて踊つてみせた。

「私チア部なの」

「ちあぶ?」

「チアリーーディングって知ってる?」

「ああ、あのポンポン持つて踊る」

「そう……まあ一番わかりやすいイメージかな」

少女は話しながら足の運びの練習を始めた。

「ステップのテンポ合わせなきやならないし、ステップのトリプル

クロスパーティーンも覚えなきやならないし……はあ

そう言い少女はステップを止めて肩を落としてため息をついた。

「なにか大変そうだね」

僕がそう言うと少女は大きく頷いた。

「この春ようやくレギュラーになれて、やっとみんなの前で踊れるようになったんだ」

「へえーそれはすごいね」

「だから、練習して部活に出て動き合わせないと……みんなに迷惑かけちゃうから、だから本当は来たくなかつた」

「そうか……で一人で帰ることにしたんだ」

「うん」

そう言い少女は黙ってしまった。たしかに崎村さんの葬儀は始まつたばかりだから、今しばらく続くだろう。

「ところでおじさんは何か部活やつてたの？」

少女におじさんと呼ばれたのに少しショックを受けながらも、僕は答えた。

「僕は美術部、って言つてもコンクールにも出せないほど下手だつたけどね」

僕がそう言つと少女は笑つた。

「おじさん絵が好きなんだ」

「良かつたら見る？」

「うん、見せて」

僕はリュックからスケッチブックを取り出して、少女に手渡した。受け取つた少女は一枚一枚ゆっくりと見ていった。

「おじさん上手だね」

少女はそう言い感心して褒めてくれた。僕は少し照れながら俯いた。

「そうだ、よかつたらこれ」

そう言つと少女は財布からチケットを取り出して、僕に渡した。

「絵のお礼、今度私のチア見に来てよ

「いいのかい？これ

「いいのいいの、本当は親に渡すつもりでいたけどさ、あんなにわからず屋だとは思わなかつたよ。でもおじさんなら分かつてくれそうだし、だからおじさんあげるよ」

チケットに書かれた場所は自宅から電車で7分ほどの場所にある所だった。

「ありがとう」

そう言い僕はチケットを貰つた。すると山側からバスがやって来た。

「あ、バスが来た」

「来ましたね」

そう言い僕と少女はバスへと乗り込んでいく。

いつもならもう少し長い時間待たされるのに、今年はすぐにバスが来た。楽しい時間は早く過ぎるものだ。

後日、僕は少女の踊るチアリーディングを見た。少なくともポンポンは持つていたが、あんなに人が高く飛んでいつたり、激しく動き回るとは思つていなかつた。

チアリーディングは過酷なスポーツということを知つたのだ。

やはりバスを待つのも良いものだ。

(後書き)

お読み頂もありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8379q/>

『バスが来るまで』【掌編・文学】

2011年2月12日01時40分発行